

市民自治講演会開催報告

日時:令和5年(2023年)11月15日(水)

午後2時から午後3時30分まで

場所:吹田市立男女共同参画センター第1会議室

「地域活性化を目指したまちづくりの戦略はどうあるべきか？」

講師:福留 和彦 さん(大和大学政治経済学部教授)

福留教授は、地域振興や地域コミュニティの再生についてご研究され、ご自身も箕面市の船場地区のまちづくりに深く関わるなど多方面でご活躍されています。地域活性化を目指したまちづくりについて、ご自身の経験も踏まえてお話ししていただいた内容の一部をご紹介します。

まちづくりはまちというシステムを作ること

私の専門は経済学ですが、私が「経済学って何ですか？」と聞かれた時に答えるのは、「経済学はシステム論です。」という言い方をします。経済学を中心になる関心というのは、企業、個人が集まった全体です。しかも、無秩序に集まっているわけではなく、ある規則性、あるいは原理に基づいて全体を作り上げている。これをシステムと呼ぶとすると、経済学は、そのシステム、経済の仕組みを明らかにする学問ということになります。

では、経済学がなぜまちづくりと関係あるのかというと、私はまちづくりは、まちというシステムを作るといふふうに理解しています。だから、経済学を研究する私が、まちづくりで関係する、アドバンテージを持って考えるという意味があると思っています。



「まちづくり」って、何？

私の考えるまちづくりは、第一に経済的再生産ができることです。そして、そのためには不断に新しいアイデアやビジネスが生まれる。それを可能とする仕組みがまちに内蔵されること。私の造語で「まちづくり当事者」と「メタ当事者」があります。意図してまちづくりをデザインするのがメタ当事者、結果としてまちづくりにつながる個人的活動がまちづくり当事者と定義しています。商店等の企業、任意団体、非営利団体等は、自分の事業をいかに軌道に乗せるか、利益を上げるかという目的で、まちづくりを意識せずに事業を進めています。そういったまちづくりを意識していない企業や団体をうまく巻き込むような仕組みを考え、デザインする作業が、メタ当事者の立場です。また、私は、箕面船場のまちづくり協議会に携わっていますが、箕面船場地区の活性化がより広域の箕面、大阪、関西、日本と連動させていけるという思いがあります。

「地域活性化を目指したまちづくりの戦略—4つのポイント—

1. ミクロとマクロの断絶

例えば、GRP(日本のGDP・付加価値にあたるのが地域ではGRP)が40兆円のある都道府県で、経済効果が2兆円のイベントが開催されるとします。このイベントが2兆円のGRPを生み出したとして、残り

の 38 兆円が下がりだした時に、その下がる力に勝てると思いますか？どこかでそのマイクロであるイベントを進めるのか、あるいはほかのマイクロを考えないといけないのか、つまり、マクロ（地域全体）の活性化をどうやって実現できるのかを考えていかないといけないですね。

2.地域経済活性化の戦略論

モノカルチャー型とダイバシティ型があり、モノカルチャー型は、目立つものを一つ選んでそこに資源やお金を注入して地域なり経済を引っ張っていくというやり方です。ダイバシティ型は、たくさんの多様なもので社会や地域を引っ張っていくというやり方で、私はダイバシティ型を推奨します。

3.まちづくり活動の組織論

地域活動が嫌いな人もいますが、彼ら自身の利益を追求してもらいながら、そういった人達をまちづくりに巻き込む方法です。自分達の利益を考えて活動している人達にも、地域に貢献してもらうためには、無理矢理まちづくりに参加しなさいと言っても難しいので、その活動をちゃんとまちづくりに結びつけていかないとけないということです。

4.共生社会と発展する地域の好循環

共生社会が何かというのは、まだ結論が出ているわけではないのですが、価値観や属性が異なる人達が同じ社会・地域の中で生活を行うことと言えると思います。お互いが意識し合って、それでいて違いを認めて、何らかの協力関係を結ぶということが理想として求められる。ただ、それらが、お互いの違いを認めるだけでなく、そこから何か新しいものが生まれてくるということを期待したいです。経済力が高まっていけないと、多様性は保持できないと私は思っています。

箕面船場まちづくり協議会の発足

繊維のまち・箕面船場は、繊維産業が斜陽化してきた 1991 年 3 月バブルピーク時に大規模な再生計画がありました。しかし、バブル崩壊でその計画は立ち消えとなりました。その後、2021 年に大阪大学外国語学部新キャンパスが開校、新図書館や新市民ホールの開業、マンションも建設ラッシュとなりました。さらに 2024 年 3 月には鉄道の延伸が予定されています。そういったまちの再開発が動き出した時に、地域住民の発言や意見を取り組むルートがありませんでした。地域住民として、この再開発がどのようなコストを生み、どのようなベネフィットを生むかということに意見を言えるようなことをすべきだと思いました。まちの居住者もこれまでの繊維団地組合関係者、小売業者、従来の地域住民等に、阪大関係者・留学生、新築マンション等の新しい住民が加わっていきます。そこで、2018 年に「箕面船場まちづくり協議会」を発足させました。

この協議会は、2 階建てになっていまして、2 階が理事会で 1 階が分科会です。分科会は地域で主体的に活動する主体であり、交通分科会、事業分科会、子育て分科会等があります。それぞれ地域に必要な課題、あるいは提供すべきサービスを考えて発足しています。まちづくり全体をデザインして、関心のない人まで呼び込むような仕組み全体を考え、作るのはこの理事会でまち全体の発展を構想します。



理念と理論と戦略



まちづくりのような活動に、貴重な時間あるいはお金をかけられないと言うような人達との対話を可能にするために、まちづくりを理論化しておくべきだというのが私の考えです。

そこで、理念と理論と戦略を考えていかないといけません。関西経済同友会で関西活性化というグループを私が指導してきた中で、関西の経済あるいは活性化をどうしたらいいかという話になると、観光産業、スポーツ等、何かめばしい単一のもので全体を引っ張るようなものを作りましようとなりました。これがモノカルチャー型です。しかし、議論していく中で、全体を引っ張るものがやられると、全体が破綻するので脆い。

そこで、地域あるいは経済が持続的に発展するというのは、やはりダイバシティ型、多様な人達、多様なビジネスが自然に生まれてくるような環境全体を作るということの方が大事だとなります。私は新しいなにかアイデアやビジネスが 100 個出てきても、その内 3 つぐらいが生き残ればいいと思っています。大事なものは、常に継続的に新しいものが出て、多くは消えてなくなる構造を問題視しないことです。

交流、そして討議へ

では、新しいものが生まれてくるために、どうしたらいいかということですが、いろいろな人の交流が前提となると思います。カフェでのダベリング（テーマやコンセプトといった目的を持って話すのではなく、おしゃべりそのものを楽しむ）等でのゆるい繋がりもいいと思います。ただ、単なる交流で果たして、いろいろな考え方を持った人達が集まって何か活動するかというと、ちょっと足りないと思います。

COM ART HILL（大阪船場繊維卸売商団地協同組合）が 1986 年に掲げたコンセプトの中に、「連携（多様性を混合し、新しいシステムを構築する連携機能等）」、「交流（人との出会いの場である交流機能等）」、「交感（外に向けて発信する交感機能等）」というものがあり、とてもいいコンセプトです。私は、ここに「討議」を加えたいと思っています。なぜ討議とかと言うと、域内に流通する情報の高度化（考える力を鍛える会話と批評）がまちづくりには必要だからです。情報に関しては、よく對外発信、情報を外部に発信することは強調されます。しかし、私は對外発信ではなく、自分達の域内、エリア内で流通する情報を鍛え直さないといけないと思っています。情報の高度化とは何かというと、一つのテーマに関してお互いが議論する、会話の内容のレベルを上げていくということです。だから、単なるゆるい繋がりではなく、討議と呼ばれるような関係性を作らないと、地域活性化は難しいと思います。



「まち」の情報処理

情報処理を理解するにあたり、誤解されがちなことがあります。それは、コンピュータ、IT 等の制御域と私達の消費活動や企業の生産活動等の実物域に分けてしまい、制御域が実物域を制御しているという見方をすることです。私は、実物域にも情報処理機能が多くあると考えています。データを人の頭やコンピュータに入力してそこに知識や関数が加わり、結果や成果として出力されるように、まちそのものが情報処理機能を担わないといけないと思います。そして、まちそのものがさまざまな解を生み出す構造を作る。だから、まちづくりは、まちというシステムを作る行為だということです。さらに、まちは解を生み出すだけで、その解が正解である必要はありません。正解かどうかは、あとから評価されることなので、とくかく解を生み出す構造を作ることがまちづくりということです。

発展する地域を作る

最後、結論となりますが、私はやはりまちづくりにはその地域が持続的あるということが外せないと思っています。箕面船場であれば、繊維団地の衰退や人口高齢化等でコミュニティ自体が維持困難になってきています。地域の低迷をマクロでとらえる分析と、地域の活性化をミクロから組み立てる論理が必要です。より小範囲のローカルなまちづくりでも実相は同じだと考えています。また、多様性が新しいものを作り出す鍵になるということは間違いのないと思っています。しかし、単なる交流では生まれにくい討議ということを含んだ活動が必要だし、多様な人達がすぐに成果を生み出すとは限らず、その仕事そのものが経済的価値を伴うものとは限りません。そういった人達でも生活できる地域というものが、経済力を持っておかないといけないと思っています。

来場者アンケート集計結果

1 回収率

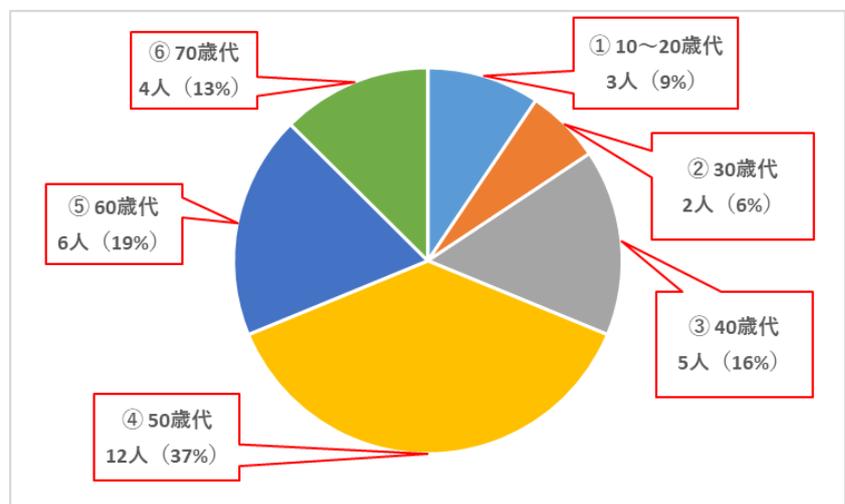
76%

(参加人数 42 人のうち 32 人から回収)

2 年代

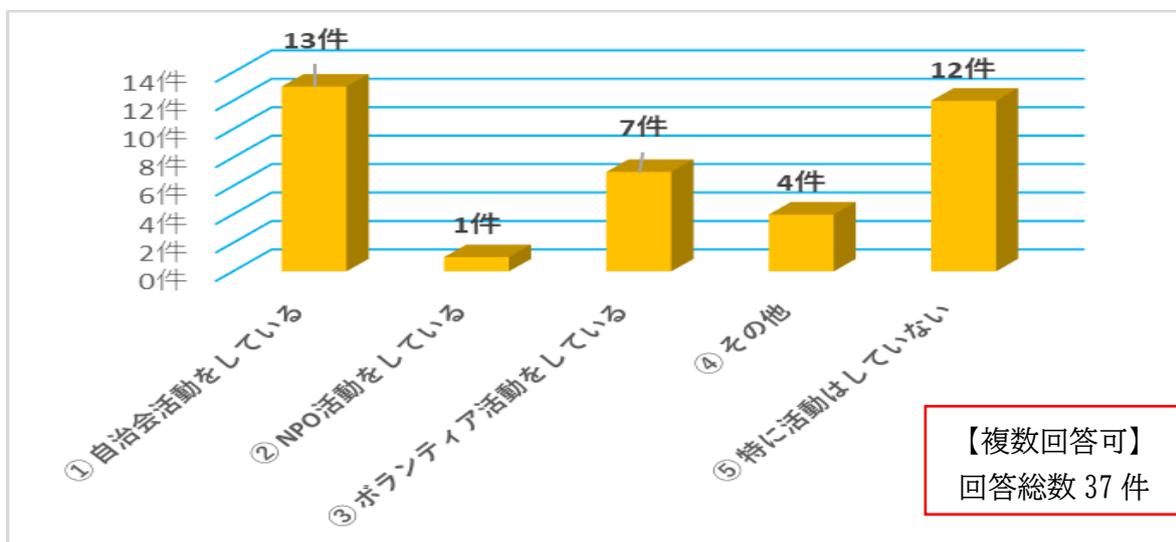
10 歳代から 70 歳代以上までのさまざまな年代の方から回答をいただきました。

【右図参照】

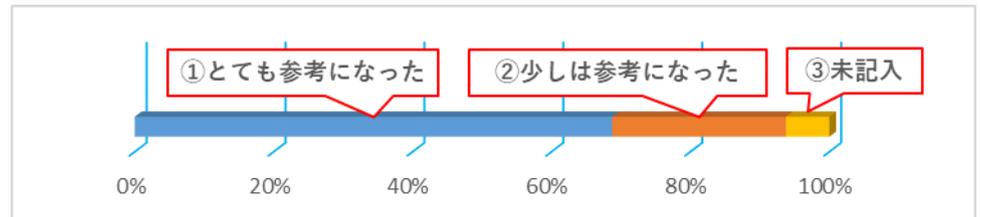


3 日常的に市民自治に関する活動については、「自治会活動をしている」が最も多く、「特に活動はしていない」が次に多い回答でした。

【下図参照】



4 講演の内容については、94%の方が参考になったと回答されました。
【右図参照】



5 シンポジウムに参加した感想（一部抜粋）

- (1) 「まちづくり」というと≒インフラという考えでしたが、持続可能なまちを作っていくには経済的合理性に目を向けて、人が参加したくなる仕組みを考えていくことが大事だと分かりました。
- (2) まちづくりが広い視野を持って活動し、トライ&エラーであることを知りました。
- (3) 経済学の観点でまちづくりに関する解説を聞くことができ、大変参考になりました。
- (4) ミクロ（単一自治会）ではなく、広域または地域を限定しないまちづくりの話ということで、ハードルは大変高いと思いますが、持続可能なシステム作りが必要であることがわかりました。
- (5) 現在、特に自治会等の活動はしておらず、何年かに一度、町内会の班長などが回ってきた時に最低限の範囲で参加をしている様な状況です。ただ、私の地域でも地域関係の希薄化が著しく、地域ネットワークの維持が問題となっています。本日のお話の中で地域でのゆるい繋がりだけでなく、討議も必要であるという大きな課題をいただいたと思います。今後の地域との繋がり参考にさせていただければと考えました。
- (6) 漫然と自治会等の活動を行ってきたが、実際に大学の先生からお話を聞いて良かったです。「システム」と表現されており、分かりやすかった。
- (7) まちづくりには色々なタイプがあることは理解できた。自分自身のレベルアップの必要性を実感した。
- (8) 自治会レベルではなく、広域の経済効果をも見すえた地域活性化のお話を聞かせて頂き、衰退する自治会についても、住民への住んでおられるメリットをミクロではなくマクロ的に考えていこうと思います。住民の皆様の知恵と努力が必要だと考えます。